



Title	遠い死、近い死
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 99-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/81749">https://doi.org/10.18910/81749</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 遠い死、近い死

鷺田清一

人生の始まりと終わり、だれも見まがうはずのないことが、いまいろいろと論議をよんでいる。受精やクローンの問題、そして脳死判定の問題。生命研究のプロ、法的権利問題のプロの意見をいろいろかがえばうかがうほど、判断のむずかしさが実感される。誕生と死、これほど明白な事実が、知らないあいだに深いもやのなかに沈んでいる……。なにか奇妙な気分である。

古代ギリシャの哲学者ゼノンが考えだした、「アキレスと亀」とよばれる逆説がある。アテネきっての快走者アキレスは、いくらがんばっても前方を進んでいる亀に追いつけないという話だ。亀がいるその場所にアキレスが辿り着いたときは、亀はすこし先を行っている。いま亀がいるそのすこし先の場所にアキレスが達したとき、亀はそれでもわずかが先に進んでいる。で、さらにそのわずか先の場所に達したとき……と考えると、アキレスはいつまでたっても亀に追いつけない。運動をそれが通過した位置の集合だと考えると、運動は不可能になるという話だ。さっと追い抜けるものが、いろいろそのしくみを考えだすと追い抜けなくなる。

脳死判定の問題にしてもどこかこのアキレスと亀の話に似たところがないだろうか。死の瞬間を厳密に規定しようとすればするほど、死は遠ざかってゆくというような。

脳死判定については、そこからさまざまな問題が派生してくるので、論議は微に入り細に入りつくされねばならないであろう。ドナー、レシピエント、そして家族のひとたち、その意思がなによりも先にじゅうぶんに問い合わせられねばならないであろう。ほんとうは意思そのものが、迷い迷ったすえに、じぶん（たち）に言いふくめるようにして決められるしかないにしても、である。

それよりも、身体がどういう状態になった瞬間をひとの死とみなせばいいのかという死の判定基準の問題が、ひとの死という問題のすべてであるかのように受けとられてしまわないかと気にかかる。死の問題は身体だけの問題ではないし、医学のプロ、法律のプロだけの問題でもない。だれもがなんらかのかたちで家族の死に立ち会い、他人の死を看とる。かならずくる死の間際にいながら、同時にそれがはてしなく遠いようにも感じられる、そんな宙づりの状態で、日々死と接しているひと

も数かぎりなくおられる。

死はそういう意味でとてもリアルである。病院で計器を前にして死をリアルにとらえにくくなっているという事実のリアルさもふくめて。死のリアルさは、他人の死、じぶんの死、つまりひとが死にゆくという事実とどうつきあうかというふうにごく身近なところで、日々、われわれの問題として経験されている。それが死の科学的判定の問題のほうに重心移動すれば、死は精密に語られれば語られるほど遠くになってしまいそう気がする。

（『京都新聞』1997年5月8日）